16　次の文章は、慶安三年（一六五〇）に書かれた、京極伊知子『涙草』の一節である。作者は播磨国龍野（現在の兵庫県たつの市）の人で、夫との間に男子（）を儲けるが、間もなく夫は病没する。その後、六歳になった頼母は江戸の親類に、養子として迎えられることとなる。以下は、その出発の準備をしている場面である。この文章を読んで後の問に答えよ。

〈名古屋大〉　二〇一五年度出題

　この君は、いかに思し知ることにか、いささか別れを悲しとも思ひたまはず、ひたすら下りたまはむことを嬉しきことに思ひ、急ぎたまうて、はかなきもてあそび物を、人の奉るをも、「これは江戸の御母上の捧げ物にこそせめ」としたためおきたまひつつ、「われも江戸の用意にいとまなしや」とのたまひて、走り歩きたまへば、いとをかし。

　世の常の子どものやうに、親の辺り離れがたく慕ひ悲しみたまはば、いまひとへ思ひもまさりて悲しからましを、なかなか心やすきものから、さすがに、かう、ア何心なくいはけなきありさまに、ひき別れたてまつらむ悲しさは、やるかたなくぞありける。

　「江戸の①北の御方の御心ばせたぐひなく、めづらかなるまでおはします」と誰も誰もめ感じたてまつるを、日ごろ聞き及びにし御ことなれば、イさりともかかるらうたきありさまを、おろかにはよも思し召さじと頼みながら、むげにならぬにて、まだはかばかしく人のおもむけをも見知りたまはず、なかぞらなるほどにて、あまたの人の中に立ちまじりたまはむことは、なほおぼつかなく、うしろめたく思ひやらるる。よろづ、心の昼夜なく、かき集めて思ふにも、胸あくべくもあらず、音をのみ泣きて日を送りける。

　かくて②霜月十日あまりにもなりぬ。下りたまふべき吉日など、さるべき方にて、時とらせけるに、「十九日、吉日なりけり。③巳の時に発ちたまひてよろしかるべし」と申しければ、さらば、今いくかにこそありけれと、日を数へつつ泣くよりほかのことなし。

　十六日には、父の御墓所へまうでさせたてまつる。はなやかに装束着せたてまつりて、でつくろひて出だしたてまつり、名残もいとどながめられて、「あはれ、ウ父のながらへまします世なりせば、この御ことをも、よろづかひあるさまにもてなしたまひて、めやすき後見ならまし。このたびの道をも具してこそ下りたまふべきに、恨めしき世のならひかな、誰も逃れぬことながら、遅れ先立つほどは、なほいふかひなかりけり。草のかげにても、いかばかり悲しと見たまふらむ」と、過ぎにしかたの悲しさも、今さらのやうに思ひ出でて、涙もとどめがたくなむ。

　　別れ行く涙のかかる衣手を④苔の下にもいかに見るらむ

　　もろともに行くべき身にもあらなくに涙ばかりや先にたつらむ

問１　二重傍線部①～④の意味を説明せよ。

問２　傍線部ア～ウを、作者の心情に留意して、適宜、語を補ってわかりやすく現代語訳せよ。

◎問３　波線部「もろともに～」の和歌を、適宜、語を補ってわかりやすく現代語訳せよ。

# 【解答と採点基準】

問１　①＝Ａ貴人の妻のことで、Ｂここでは頼母の養母となる人のこと。

Ａ＝５〔「奥方」「正妻」も可。〕

Ｂ＝５〔「義母」「養子先の母」も可。〕

　　　②＝旧暦十一月のこと。

「旧暦」はなくても可。

　　　③＝午前十時頃のこと。

　　　④＝Ａ墓の下のことで、Ｂここでは作者の夫が葬られているところのこと。

Ａ＝５〔「お墓」「墓の中」も可。〕

Ｂ＝５〔「作者の夫」か「頼母の父」がなければ0。「眠っている所」「がある所」も可。〕

問２　ア＝Ａ江戸へ養子に出されるのに、頼母は無邪気であどけない様子で、Ｂお別れ申し上げるような私の悲しさは、どうしようもなくつらいものだった。

Ａ＝５〔「江戸へ養子に出される」「頼母」がなければそれぞれ減点２。「無邪気」「あどけない」がなければそれぞれ減点１。〕

Ｂ＝５〔「私の」がなければ減点２。謙譲表現がなければ減点２。「ような」「つらいものだった」はなくても可。〕

　　　イ＝Ａ養子であるといってもＢこれほどかわいい様子の頼母を、Ｃまさかいい加減にはお思いにならないだろうとＤ江戸の養母の人柄を頼りにはするけれど、

Ａ＝２〔「そうであっても」のままは0。〕

Ｂ＝３〔「これほど」「かわいい」「頼母」がなければそれぞれ減点1。「かわいい」は「幼い・あどけない」でも可。〕

Ｃ＝３〔「まさか」「～ないだろう」がなければそれぞれ減点１。「おろかなり」を「愚か・賢くない」と訳した場合減点１。尊敬表現がなければ減点１。〕

Ｄ＝２〔「養母」がなければ０。「人柄」はなくても可。逆接になっていなければ減点１。〕

　　　ウ＝Ａ頼母の父が生きていらっしゃる世だったら、Ｂ頼母を養子に出すことも、Ｃすべてうまくいくようにお取りはからいになって、Ｄ見苦しくない後見人であっただろうに。

「～たら～だろうに」と反実仮想で訳していなければ全体０。

Ａ＝３〔「頼母の父」がなければ減点１。尊敬表現がなければ減点１。〕

Ｂ＝２〔「このこと」のままは０。〕

Ｃ＝２〔「うまくいくように」は「かいがあるように」でも可。「もてなす」のままは減点１。尊敬表現がなければ減点１。〕

Ｄ＝３〔「見苦しくない」「後見人」がなければそれぞれ減点１。〕

問３　Ａ子どもと江戸へ一緒に行くことができる身でもないのに、Ｂどうして別れを悲しむ涙だけが子の出発に先立って流れているのだろうか。

［別解］子どもと江戸へ一緒に行くことも、夫のいるあの世へ行くこともできる身ではないのに、夫に先立たれた我が身や、草葉の陰で悲しんでいるだろう夫のことを思うにつけ、どうして涙だけが真っ先に流れているのだろうか。

Ａ＝５〔「～ないのに」がなければ０。「子どもと」「江戸へ」がなければそれぞれ減点２。「～できる」もしくは「～はず」がなければ減点１。〕

Ｂ＝５〔「どうして～（ている）のだろうか」がなければ減点３。

「息子の旅立ち・出発」がなければ減点２。〕

# 【現代語訳】

　この君（頼母）は、どうおわかりなのだろうか、少しも（私との）別れを悲しいとお思いにならず、ひたすら（江戸へ）下りなさるようなことをうれしいことだと思い、（江戸行きの）準備をなさって、ちょっとしたおもちゃを、人が差し上げた物も、「これは江戸のお母上への贈り物にしよう」と用意なさっておいては、「私も江戸（行き）の用意に（忙しくて）暇がないよ」とおっしゃって、走り回っていらっしゃるので、とても面白い。

　世間一般の子どものように、親のそばを離れがたく（親を）慕い（別れを）悲しみなさるなら、今一層思いがまさって悲しいことだろうが、（そうではないので）かえって安心しているけれど、そうはいってもやはり、このように、

問２ア（江戸へ養子に出されるのに、頼母は）無邪気であどけない様子で、お別れ申し上げるような（私の）悲しさは、どうしようもなくつらいものだった。

　「江戸の奥方の御人柄はこの上なく、めったにないほど立派でいらっしゃる」と誰も誰もが褒めて感心し申し上げるのを、常々伝え聞いていたことであるので、問２イ養子であるといってもこれほどかわいい様子（の頼母）を、まさかいい加減にはお思いにならないだろうと（江戸の養母の人柄を）頼りにはするけれど、まったく乳飲み子の年ではなくて、（でも）まだはっきりとは人の考えもおわかりにならず、中途半端な年頃で、たくさんの人の中に立ち交じりなさるようなことは、やはり気がかりで、心配だと思いを馳せてしまう。すべて、四六時中、あれもこれも思うにつけても、心が晴れるはずもなく、声をあげて泣くばかりで日を過ごした。

　こうして旧暦十一月十日過ぎになった。（頼母が江戸へ）お下りになるのによい日などを、しかるべきところで、日時を選ばせたところ、「十九日が、吉日ですよ。午前十時頃に出発なさるのがよろしいでしょう」と申し上げたので、

それならば、（出発まで）あと幾日か（だけ）だよ、と日を数えながら泣いてばかりいる。

　十六日には、（頼母の）父（で私の夫）のお墓にお参りさせ申し上げる。美しく着物をお着せ申し上げて、なでて整えて送り出し申し上げ、名残惜しくますますぼんやり見つめてしまって、「ああ、問２ウ（頼母の）父が生きていらっしゃる世だったら、頼母を養子に出すことも、すべてうまくいくようにお取りはからいになって、見苦しくない後見人であっただろうに。（私一人では頼りないことだ。）この（江戸への）旅の道も（存命ならば父親は頼母と）一緒に（江戸へ）お下りになるはずなのに、恨めしい人の世のならわしだよ、（死別は）誰も逃れられないことではあるけれど、（一方は）生き残り（一方は）先に死んでいくことは、やはり（悲しくて）言いようもなかった。草葉の陰でも（夫は）、どれほど悲しいとご覧になっていることだろう」と、（夫が死んだ）過去の悲しさも、今さらのように思い出して、涙もとどめがたく。

　　　 子どもとの別れがつらくてとめどなく流れる悲しみの涙で濡れた着物の袖を、草葉の陰で夫はどのように見ていることでしょうか。夫もあの世で悲しんでいることでしょう。

　　問３子どもと江戸へ一緒に行くことができる身でもないのに、どうして別れを悲しむ涙だけが子の出発に先立って流れているのだろうか。